

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

震災ボランティアに参加して（宮城第1ターム）

43年の長い独身生活に終止符を打った僅か3日後の7月19日から23日の5日間、日教組の震災ボランティアに参加しました。

1日目は午後5時までに松島のホテルに集合の日程であったが、台風の影響で飛行機が欠航になりすべてJRでの移動となった。7時40分に大分駅を出発し松島駅に着いたのは午後6時、河野副委員長と2人集合時間に遅刻してしまう。松島や電車の中から見た限りでは震災の被害をほとんど感じることはできなかった。夕食後に今回のメンバーの顔合わせをした。今回のメンバーは本部の木下さん、大杉さん、和田さんと長野、兵庫、広島、大分から各4人の19人で構成されていた。

2日目から4日目までが実際にボランティア活動を行う。今回の第1タームでは、石巻市の中里小学校の支援活動を行った。朝5時半に朝食をとり、6時半に石巻に向けマイクロバスで出発。8時から15時まで昼食を挟み支援活動を行う。ホテルには午後5時頃に帰り、お風呂に入り7時から夕食その後は自由という日程であった。20日（2日目）は中里小学校では終業式であった。到着後、校長先生をはじめとする教職員の方に挨拶をした後、学校周辺の溝の清掃活動を行った。大杉さんの指示で30分作業し10分休憩のペースで作業を行う。溝の蓋を開け、泥を土嚢袋に詰める作業であった。この日は台風の影響で最高気温は25℃程度であったが、強烈な風でグラウンドの砂が砂嵐となり吹きつけ、顔は痛いし目や耳に砂が入り非常に苦しい思いをした。



21日（3日目）の午前中は学年毎の学習支援活動の補助を行う。高校の教員である河野副委員長と私は6年生の担当として、算数の4年生からの復習（かけ算・わり算）のお手伝いをした。突然現れたおっさんたちにもすぐ馴染んでくれ、積極的に質問してくれた子どもたちに私たちが癒された。午後はプール周辺の草むしりなどの清掃、広島の4人と大分県教組の2人はプール監視の活動をした。1学期の授業ではプールがなかったらしく、気分的には寒いぐらいであったが多くの子どもが時間いっぱい今年初めてのプールを楽しんでいた。



私の趣味は万華鏡の収集と製作であり、被災地の子どもと一緒に作ることも参加した目的であった。学習支援の後、6年生12人と阿部先生と万華鏡作りを行った。2学期の授業でも6年生68人で作ってくれることになった。

また、この日の作業後ホテルに帰る道中、石巻港周辺の被害の状況をマイクロバスの中からはじめて見る事ができた。膨大に積み上げられたがれきや車の山、何とも言えない臭い、骨組みだけになった家屋や工場に津波のすごさを見せつけられ言葉を失った。

22日（4日目）も午前中は学習支援、午後はプール監視と近所からの要請で台風の風で道路に飛ばされた砂の除去作業を行った。

中里小学校の体育館にはまだ60人（震災直後は130人）の方が避難生活を続けており、グラウンドでは中学校の仮設校舎の建設がはじまっていた。まだまだ書かなければならないことがたくさんあるし、私にとっては初めての東北であり多くの事を考えさせられるボランティア活動であった。最後のミーティング大杉さんが言った、「今回見た事、経験した事を帰ってみんなに伝えてください」という言葉にただ頷くだけだった。今回一緒に活動に参加された皆さんお疲れさまでした。皆さんのおかげで楽しく活動することができました。ありがとうございます。

## 東日本大震災 日教組被災地支援・教育復興ボランティアに参加して（宮城第2ターム）

2時49分を示したまま止まった時計、「3月12日第64回卒業式」と書かれたままの職員室の黒板、「あおげばとうし」の歌詞が書かれたままの音楽室、「卒業式まであと1日」のカウントダウンカレンダーの掛けられた3年生の教室、戸倉中の校舎の中は、3月11日のまま時が止まっているようでした。教室やロッカー、廊下、ホールのほこりを掃き、雑巾をかけ、ワックスをぬり椅子を並べる。7月31日の卒業式の準備を黙々と行いました。水をかぶった1階も、何回も掃き雑巾を掛け、玄関前の草引きをして第3タームへと引き継ぎました。水道も電気もまだ復旧していない中、グラウンドには仮設住宅が建ち、体育館には支援物資が山積みになっていました。



もう一方の石巻市の中里小学校の学習支援は、遅れている算数の授業を中心に個別指導を行いました。玉のような汗を流しながら黙々とおはじきを操作する1年生。1時間半はあっという間でした。午後からのプールは、子どもたちのはじけるような笑顔と歓声にあふれていました。我々ボランティアとふれあう子どもたちの姿に一瞬状況を忘れそうになるほどでしたが、体育館は避難所になっておりグラウンドには重機が入り、中学校を受け入れる仮設校舎の建設の準備をしているのでした。プールの休憩時間に1年生が「僕の家は津波で流されたんだ。アパートに引っ越ししたんだよ」「僕のおばあちゃんは津波で流されたの。まだ見つからない。どこにいるのかな」「ぼくが頑張らなくちゃいけないんだ」とロク々に話してくれました。ボランティアである自分たちが逆に力をもらっているようでした。

「いつまでも被災者意識ではダメだと思わせてくれたのは、生徒たちの笑顔とパワーでした。つらいこと苦しいことはいっぱいあるだろうに、それを乗り越えていこうとする子どもたちの明るさでした」と話してくださったのは、津波で3階建ての家とご両親を亡くされた戸倉中学校の教務主任でした。「学校というのは、子どもが集い、地域の人が集まる地域のシンボルです。学校があるから地域がまとまることができていたのです」としみじみ話された戸倉中の校長先生も、被災され家をなくしておられました。それでも、仕事があり子どもがいる幸せを思い、前を見てすすもうとする姿に胸が熱くなりました。

お年寄りをより高いところへと避難させた中学生、「がんばるんだ」と自分に言い聞かせた小学生、『あきらめない街石巻 その力に俺たちはなる!』と書かれた旗の下で野球の練習に汗を流す高校生、街を復興させていくのは子どもたちの力なのだ改めて確信させられました。

7月31日の「第64回戸倉中学校卒業式」に思いをはせる第2タームの仲間たちと、新たな絆を結ぶことができたことに感謝しています。ありがとうございました。

